

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果

- | | | |
|----|-----------------|--------|
| 1. | 教育文化学部・教育学研究科 | 研究 1-1 |
| 2. | 医学部・医学系研究科 | 研究 2-1 |
| 3. | 工学資源学部・工学資源学研究科 | 研究 3-1 |

教育文化学部・教育学研究科

I	研究水準		研究 1-2
II	質の向上度		研究 1-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況について、平成 16 年度から平成 19 年度の研究出版物の発表は、論文 132～151 件、著書 33～53 件、合計 167～199 件である。教員一名当たりの研究出版物件数は 1.4～1.9 件である。また、作品発表は国内外あわせて平均約 24 件、受賞件数は過去 4 年間に平均約 4 件に達した。科学研究費補助金の採択率は、平成 16 年度 38%から平成 19 年度 48%に伸びている。科学研究費補助金以外の研究資金の獲得状況も 4 件から 14 件と増加している。また当該学部教員を中心として「白神研究教育機構」を設置し、教員集団の教育・研究体制を整え、新たな「白神学」を構築したことは、優れた成果である。

以上の点について、教育文化学部・教育学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、教育文化学部・教育学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、教育文化学部・教育学研究科において、教育・心理、特別支援教育をはじめ、人文・社会、自然さらに保健・体育、芸術の各分野で相応の優れた成果を上げている。学術面では食生活学、美学・美術史、文学、日本語学、文化人類学・

民俗学、教育学、教科教育学、教育心理学、経済政策、特別支援教育、数学、天文学等多くの分野で研究成果が生まれている。卓越した研究成果として、例えば教育学における『ナチズム・抵抗運動・戦後教育－「過去の克服」の原風景』の挑戦的力作とされる成果、哲学分野とりわけ歌舞伎研究を囃子方という音曲面から分析した『歌舞伎囃子方の楽師論的研究－近世上方を中心として－』等評価の高い成果が生まれている。社会、経済、文化面では音楽分野の作曲作品『火の曲』の完成度が高いと評価された作品、地球惑星科学分野の『世界一おいしい火山の本－チョコやココアで噴火実験』により児童に火山に関する関心と知識を広める成果が生まれている。また、受賞も平均約4件あることは、優れた成果である。

以上の点について、教育文化学部・教育学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、教育文化学部・教育学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成16～19年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している

[判断理由]

「大きく改善、向上している」と判断された事例が2件、「高い質（水準）を維持している」と判断された事例が1件であった。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間終了時における判定として確定する。

医学部・医学系研究科

I	研究水準		研究 2-2
II	質の向上度		研究 2-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究活動の実施状況については、総研究発表数はこの 4 年間では若干低下傾向にあるものの、ポール・ヤンセン賞を始め各種学会賞の受賞者が増加しているので、個々の研究活動の水準は比較的高いレベルに維持されている。研究資金の獲得状況については、科学研究費補助金の採択状況が平成 19 年度には若干低下しているものの、その総額は 2～3 億円に達していることなどは、優れた成果である。

以上の点について、医学部・医学系研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、医学部・医学系研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、比較的高い水準のものが散見され、その研究内容は秋田大学にとどまらず、教員による国内外の様々な研究機関との共同研究より達成され、大きく発展を遂げている。また、血液内科、呼吸器外科、泌尿器科のように、臨床部門から独創性のある研究が多数生まれていることは評価できる。社会、経済、文化面では、地域の高校生に対するバイオサイエンス教育や市民公開講座を主催し、精力的に活動していることなどは、優れた成果である。

以上の点について、医学部・医学系研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、医学部・医学系研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「高い質（水準）を維持している」と判断された事例が 1 件、「相応に改善、向上している」と判断された事例が 3 件であった。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間終了時における判定として確定する。

工学資源学部・工学資源学研究科

I	研究水準		研究 3-2
II	質の向上度		研究 3-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況について、平成 19 年度の教員一名当たりの平均論文数は 1.13 件である。平成 19 年度の特許出願件数は 32 件に上る。研究資金の獲得状況については、科学研究費補助金の採択件数（採択金額）が年平均 44 件（約 8,400 万円）で、採択率は過去 4 年間を通じて 29.8%となっている。その他の競争的外部資金の受入れ状況は、平成 16 年度から平成 19 年度までで 55 件あり、共同研究 151 件、受託研究 135 件を受け入れて活発に研究を展開するなど、相応の成果がある。

以上の点について、工学資源学部・工学資源学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、工学資源学部・工学資源学研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、重点的研究として資源循環型社会の実現を目指した資源素材系の研究を中心に、資源・環境・エネルギー・高齢化対応技術と新産業創出の分野で研究が展開されている。優れた研究成果として、例えば、腐食疲労損傷の定量化がイギリス腐食学会賞を受賞するなどの成果を上げているほか、重点研究の資源素材系の研究や高齢化に対応した技術開発と薬物障害の解明等医工連携に関する研究をはじめ、

機能性流体を用いた免震技術、電子デバイス・計測技術、材料・合成のプロセス技術等の分野で多くの成果を収めている。社会、経済、文化面では、高齢化に対応した技術開発、医工連携、地域新生コンソーシアム事業、地域社会の情報ネットワーク構築等の研究成果において新聞やテレビ番組で報道されるなど、相応の成果を収めている。また、過去4年間の研究成果によって、国内、国際学会の学会賞等を32件受賞することは、相応な成果である。

以上の点について、工学資源学部・工学資源学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、工学資源学部・工学資源学研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成16～19年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「高い質（水準）を維持している」と判断された事例が5件、「相応に改善、向上している」と判断された事例が5件であった。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間終了時における判定として確定する。

